

「いいかげん」の史的変遷について

山本 絢佳

はじめに

日常で使用されている日本語には、元々持つ語義とは異なる意味で使用されているものが存在する。我々を書く、または発する言葉それ自体の語義と、現代常識的に使用される意味用法とにずれが生じるものなかで、本稿では「いいかげん」に着目して考察を進めてゆく。

現代、「いいかげん」の意味について『日本国語大辞典』第二版 小学館(2000)では

- ㊦ [連語] (「よい加減」の変化したもの) ちょうどよい程度。適度。
- ㊧ [形動] ①かなりの程度であるさま。いいくらかげん。
②徹底していないさま。

と分類されている。「㊦の場合は「いい」と「加減」とが、それぞれ独立したアクセントで発音されるのが普通であるのに対して、㊧は「いい加減」全体で平板型に発音される」ともあり、ちょうどよい程度という意味での「いいかげん」は二語がそれぞれ独立した連語ととらえられ、「いいかげん」を一つの語としてとらえた場合は㊧の意味での用法のみであると考えられる。

「良い」+「加減」の連語「いいかげん」はプラスの意味であるが、複合にて一語化した「いいかげん」は、現代では「そろそろ」と解釈されるような、程度を表す意味や、「徹底していない、無責任な」というマイナスの意味で用いられる事が一般的である。このように「いいかげん」がプラスからマイナス、またはそのような評価を下す言葉から単なる程度のみを表す言葉へと変化した過程を、時代を追って明かしてゆく。ただし、いつ一語化したか、いつ「良い」の語形が「いい」に固定したかについては、本稿では立ち入らない。

第一章 「いいかげん」の語誌

第一節 先行論

堀井(2003)を見ると、「いいかげん」の項目で以下のように説明している。

ちょうどよい程度の意味の「いい加減」から。加減は加えたり減らしたりすることで、物事の具合や調子をいう。かなりの程度まで達しているのもうほどほどにしたいの意味は江戸時代からある（『春色梅児誉美』「女房じみて嬉しいが、もういいかげんにしねへな）。明治初期には、きちんと徹底しないでおおざっぱな、無責任でなげやりな意味にもなった（『安愚楽鍋』「いいかげんなごまかしをいって脱して来たが）。副詞として「いい加減いやになる」のように、かなり、相当の意味で使われるようになったのも明治時代からである。

また前田（2006）も、「いいかげん」の出現について以下のように述べている。

そもそも「良し」＋「加減」という形の用例を近世以前に見つけるのは困難である。現在確認している最古の例は、

○（茶屋）はてあついをまいる衆も有り、又ぬるいを好いて参る衆も御座る。夫成らば能加減にして進ませせう。（欄宜）申、能加減に進ぜさせられい（『大蔵流虎寛本狂言集『欄宜山伏』）

○たけのねにいがらにてほらするといふたハ、よいかげんな事なり（『私可多咄』一六七一年）

である。『欄宜山伏』の例は、山伏が茶屋に入って、お茶の温度に注文をつける場面で使われている。この「よい加減」は「お茶の温度が熱すぎずぬるすぎず、ちょうどよい程合い」と解釈できるので、現代、頻繁に使われるようなマイナスの意味ではない。一方、「私可多咄」の例は「（比丘尼が）竹の根を藺殻で掘らせましようと言ったのは、根拠のない適当な話だ」と解釈できる。この場合、本来の「良し」＋「加減」の意味ではなく、一語化して、派生的な意味を持つ形容動詞となった用法ととらえることができよう。

堀井氏は明治初期に徹底していないさまというマイナスの意味用法が生まれたと述べているが、前田氏は江戸期の例を挙げ、すでに江戸時代にはマイナスの意味での用法が存在していたことを明らかにしている。

二つの先行研究を見たが、江戸時代より前の資料からその用例を得ることが難しいことは共通の認識である。

第二節 室町時代の用例

しかし、すでに室町時代に「いいかげん」にあたる言葉は使用されていたようである。『時代別国語大辞典 室町時代編五』三省堂（2001）において、記載を確認した。

よいかげん [良加減] ほぼ妥当な程度、ほとんど、の意で、事が徹底せず、

当座のまに合わせですますことをいう。「問口即一トハ、物ヲ云タモ悪
イ、又不云モ悪イト云ヘバ、又好イカゲンニセントスルガ、其ハ猶アシイ
十万八千ゾ」（仁和寺本無門関抄成就）「有尊—ヨイカゲナル人也。実祿
也」（虚堂録臆断）

用例はいずれも抄物が示されている。『仁和寺本無門関抄』では、ちょう
どよい程度という意味で使用していると判断できる。『虚堂録臆断』は天文3
（1534）年成立とされるものである。この用法では「人」を修飾することから
も無責任な、という意味であると判断できる。マイナスの意味用法もこの時代
から存在していたことがわかる。室町時代の用例として現在確認できるものは
この二例のみであり、この語を見つけることが困難であることは間違いない。
しかし抄物において使用をうかがえることから、話し言葉では早くに意味が転
化していた可能性が高いと言えよう。

第二章 近世における「いいかげん」

では、近世以降どのように「いいかげん」の意味が変化し、現代のようなマ
イナスの意味が目立つようになるのであろうか。近世文学作品、落語から「い
いかげん」の用例を確認し、その変化をたどってゆく。今回の調査では文学作
品はデータベース「ジャパナレッジ」、落語は「大系本文（断本）データベー
ス」を用い「加減」または「かげん」で検索して得られた用例を対象とした。「良
い」の語形は「よい」「いい」「ゑい」「ゑえ」「能」が検出された。今回のデー
タベースによる調査では「よき」「ゆひ」といった語形は見られなかった。

調査の結果は以下の表にまとめた。意味別に使用状況を観察してゆくため、
『日本国語大辞典』の意味分類に則し、⊖「ちょうどよい程度。適度。」をプラ
スの意味のもの、⊖①「かなりの程度であるさま。いいくらかげん。」を程度
を表すもの、②「徹底していないさま」をマイナスの意味のものとして分類し
考察する。

近世文学作品調査結果

	プラス	程度	マイナス	その他	合計
1600年後半	3		4		7
1700年前半	5	4	3	2	14
1700年後半	3	5			8
1800年前半	1	18	2		21

断本大系調査結果

	プラス	程度	マイナス	合計
1600年後半	1	1	2	4
1700年前半			1	1
1700年後半	6	3	2	11
1800年前半	2	11	2	15

第一節 プラスの意味と程度の意味との二面性

ちょうど良い程度の意味か又はかなりの程度の意味であるのか見分けが難しい用例があった。以下にその例を示す。

(1)平生聞くことなれば、もはやよいかげんにておかれいで、子なら一人を、世に持つたやうに、苦にせらるゝ笑止さ。 (『好色敗毒散』1703年)

(2)寛闊の高上世尊ときこえけるを、人のそしりをうけてからは物がないと得道して、よいかげんに世をのがれ、中柱入りたる小座敷を、ありし楼台と住みかへ (『好色敗毒散』1703年)

(1)は「もういい加減にすればよいのにやめられずに」と訳が付されており、そろそろ、つまり程度を表す意味で用いられている。しかし接続助詞「いで」とあるので、直訳では「ちょうどよい加減にしておかないで」となるはずである。この「よいかげん」はプラスの意味なのであるが、それが否定されて文全体の意味としては「かなりの程度なのでほどほどにしたい」となる。現段階では「許容できる程度」の状態であるのだが、その状態を超えないように「これ以上は適度な状態からあふれてしまうから、ちょうどよい程度で収まるようにしておく」という意味で使用されやすいのであろう。(2)は現代語訳でも「よい加減に隠居して」となっている。文脈からの判断では、ちょうどよい頃合いとも、「もうそろそろ」つまり、かなりの程度であるさまでの用法とも解釈することができる。榎本大系でも同様に考えられる用例が検出された。

(3)そふしていゝかげんなじぶんについて見て、あいつらが別条なれば、そこでこつちが喰うといふものだ。 (『落咄臍くり金』1802年)

(4)コレ、手めへを今売てやるから、いゝかげんな時分に、途中でひつぱづじて、そつともどれ。 (『落咄腰巾着』1804年)

全賢善(1998)に「適当」の意味判断についての論がある。

そもそもある語の意味究明には、その語の辞書の意味は勿論のこと、その語の用いられる文脈的特徴や文化的背景などの観察、分析、記述が欠かせないことは言うまでもない。「適当」のように文脈や発話時における話し手の主観的判断、心的態度によって曖昧さが深まる語であればあるほどより一層そうである。

この時代の「よいかげん」は現代における「適当」と同様の性質を持っていたのではないだろうか。「よい加減に隠居する」という文では「ちょうどよいころあいに隠居する」という意味と「間もなく隠居する」と、どちらの意味にも取ることができる。この時代では、「ちょうどよい」という意味と「もうそろそろ」の二面性を持ち合わせており、このうち「よいかげん」の意味が転化してプラスの意味と単に程度をあらわす意味とに分化してゆくのであると考

えられる。

第二節 程度の用法の口語性

次に程度だけを表す意味の用例を見る。

(5)若衆何とも其の意得られず、「よいかげんになぶらんせ」と、さらにとりやはねば (浮世草子『野白内証鑑』1710年頃)

(6)小僧、はさみ将棋もゑへ加減にしまふて、お茶を持って来い (黄表紙『咄多雁取帳』1783年)

また1800年代における用例では、人情本『春告鳥』10例、滑稽本『東海道中膝栗毛』8例と、この二作品がすべてを占めていた。断本大系でも程度の意味での用例が最も多く確認できた。

(7)いゝかげんに気をもませるな (人情本『春告鳥』1837年)

(8)ゑいかげんにこゝへ泊まるふか。 (滑稽本『東海道中膝栗毛』)

程度の意味での用例は口語で書かれた作品に使用が偏っており、また命令の文で用いられる場合が多い印象を持つ。1700年代から多く使用されるようになり、1800年代には庶民の間でよく使用される言葉として浸透していたようである。1600年代後半に1例確認できるが、これは1698年『初音草断大鑑』の例であり、やはり1700年頃からと考えると良いだろう。前田(2006)も1800年以降にこの意味用法が圧倒的に多いことを指摘している。引用文中のBとはかなりの程度であるさまでの意味である。

ここで顕著なのは両資料群ともにBの用例が他を圧倒して多く、一八〇〇年以降急増することである。Bの意味は先に述べた通りだが、用法としては「いゝかげんにしてくんねへ」のように、「いいかげん+(命令形)」で使用されることが多い。「うそもよいかげんに云たがよい。」のような表現も遠回しな禁止と解釈すると、この期の「いいかげんに」は禁止に代表される、命令表現に多く使われるとあってよい。今回調査した範囲では、一八〇〇年以降の断本、滑稽本、人情本に特に多く見られ、当時流行した慣用表現ではないかとも思われる。

現代でも「いいかげんにしろ」という慣用表現といえる用法が存在しているが、この用法が1800年代に流行していたと考察している。たしかに本調査でも用例の多くを占めていることから、当時盛んに用いられた表現なのであろう。江戸後期の戯作文学、特に滑稽本は庶民の生活を舞台にした笑い話であり、落語も同様に笑いを提供するものである。「いいかげん」の果たす役割はいわゆる現代の「つつこみ」のような役割を果たしていたのではないだろうか。どこがおかしな行動や言動を制止するための定型文のような扱いで「いいかげん」

が使用されていたと思われる。

第三節 マイナスの意味の用例

マイナスの意味での用法は、文語体でも用いられる語として扱われていたと考えられる。

(9)いづれか顔あげて言葉もかへされず、よい加減にたらしめて、おもひを胸にあまらせける。(浮世草子『好色一代男』1682年)

(10)「天竺までものほりつめたる男なればこそ、月夜に挑灯もちになつて東口までおくります」と、よい加減に紛らかされしを

(『万の文反古』1696年)

いずれも1600年代の例であるが、文語体で書かれた作品に登場する。室町時代の抄物でマイナスの意味の用例が確認されたことより、古くから使用されていた意味であり話し言葉の中でのみ使用される低次な言葉にはとどまっていなかったのだろう。しかし程度の意味での用法の流行により、江戸時代にはその陰に隠れてしまっていたのではないだろうか。

第四節 近世における用法の特徴のまとめ

近世の「いいかげん」の用法の特徴として、程度の用法が特に1800年代に例の多くを占めていることが挙げられる。

山口(2006)は、「よつほど」や「よほど」の言い方で「よほどがよい」といった形に変化した例がみられることについて、「いいかげん」についても触れている。

江戸時代になってこういう言い方が生じた背景には、室町時代以降、適度な程度や相当な程度を表すのに、後述の「よきころ>よいころ」「よきかげん>いいかげん」といった類義形式が生じたことによる競争の激化が考えられる。

山口氏によれば、江戸時代に新たに登場した程度をあらわす形式のひとつに「いいかげん」が含まれるとしているが、今回の調査結果をうけて本稿著者も氏の説に同意する。また「江戸後期以降、適度な程度や相当な程度を表す類義の形式には、次のような「ほどよし」「ほどがいい」式の言い方も出現している」とも指摘している。程度を表す用法は、類義形式の競争により1700年代に発生した用法であり、命令表現に伴い「ちょうどよい程度」の限界を表す意味として浸透していったのである。この話し言葉として発展した「いいかげん」は、口語で記された人情本や滑稽本や落語で盛んに用いられ、笑いを生み出す効果を持つ一つの決まり文句という位置を確立したのだ。またマイナスの表現はこの時代にはすでに存在していたのであるが、現代のように「いいかげん=マイ

ナスのイメージ」はまだなかったようである。プラスとマイナスのどの意味ともとることができる多義的な語であったと言える。

第三章 近代における「いいかげん」

この章では、近代の文学作品、新聞記事を対象に「いいかげん」の用例を確認する。

太陽コーパス（雑誌『太陽』^(注1) および、神戸大学附属新聞記事文庫を対象にとりて、「いいかげん」の使用状況を見た。上記のコーパスを用いた理由は、文語から口語へと移行してゆく時代の資料を検索でき、近代の書き言葉資料として十分な役割を果たすと考えたためである。神戸大学新聞記事文庫は、採録対象紙の幅広さ、資料のデジタル化による扱いやすさにより採用した。

調査結果を以下の表にまとめた。その他はどの意味にも分類できない、もしくはどの意味ともとることができ判断できないものである。

太陽コーパスの調査結果の注目すべき点はマイナスの意味である。1909年以降マイナスの意味での用法がみられるようになり、さらに最も使用頻度が高い用法となっている。反対にプラスの意味の用法は1895年では3例確認できるものの、それ以降は1例ずつと少ない。また新聞記事を見ると、どの年代でもプラスの意味での用法が少ないことがわかる。1912年にはすでにプラスの用法がかなり衰退していたようであり、マイナスの用法が圧倒的に多い。程度をあらわす用法は1918年以降増加傾向にあるように思われる。

「太陽」コーパス

	プラス	程度	マイナス	その他	合計
1895	3				3
1901	1	2		1	4
1909	1	4	4	1	10
1917	1	2	9	1	13
1925	1	5	5	1	12

神戸大学新聞記事文庫検索結果

	プラス	程度	マイナス	その他	合計
1912	1	0	6	1	8
1913	3	1	1	1	6
1914		1	4		5
1915	1	1	2		4
1916	1	1	8		10
1917		1	4		5
1918	3	3	9	1	16
1919	3	7	18	2	30
1920	2	7	22		31
1921	1	3	9	1	14
1922	1	11	10		22
1923	2	7	20		29
1924	2	5	12		19
1925	1	4	10		15

第一節 プラスの意味からマイナスの意味への転化

(1)以下の例はプラスとマイナスの意味が紙一重の位置にあると考えたものである。

(1)お上手ものは、人を怒らせては損なりとて、よい加減にあしらふ、これ世才にたけた人也、
(大町桂月『文芸時評』1901年)

(12)或時、二人で京極の裏通りを歩いて居ると、ばつたり私の叔父に會つた。私は好い加減に胡魔化して別れたが、お町は甚う心配して
(森田草平『反魂香』1917年)

(11)は世才に長けた人物は人を怒らせないよう程よくあしらうという文であるが、この場合は「ちょうどよい程度」ではなく、「相手の気分を害さない程度」なのである。相手の気分を害さない最低限の程度をわずかにでも踏み越えてしまうと、まさしくなげやりな対応だと、マイナスの意味での「いいかげん」の評価へと転落してしまうのだ。プラスの意味の範囲の中でもマイナスと紙一重の位置にあると言えよう。一方(12)はマイナスの意味として分類したが、(11)と対比して考えるためここで例を挙げる。叔父に対し「好い加減の誤魔化し」をしてその場を逃れたという場面である。(11)と(12)の相違点について(11)の場合、世をうまく渡ってゆくため相手にも自分自身にも不利益になるような事態が起こらないようにあしらうものの、相手への多少の配慮がうかがえる。しかし(12)では、相手への配慮というよりも自身に不利益になることが起こらないように誤魔化したと思われる。完全な嘘をついて相手を誤魔化したのならば、マイナスの意味であるが、叔父への配慮があったのならプラスの意味でとらえることも可能である。

(13)さういふ連中は皆不思議な變な眼付で私を見る。私は何だか可い加減な見世物にでもなつて居るやうな気がして心外でならない。
(黒田清輝(談)『仏国に於ける寄宿舎生活』1909年)

(13)の例について、周囲から不審な目で見られていることを「可い加減な見世物」とたとえている。単純に見世物といえばマイナスのイメージを持つが、この場合はマイナスと分類してよいのであろうか。何度も述べているが、辞書でのマイナスの意味は「徹底していない、なげやりな」という意味である。しかし「なげやりな見世物」という意味ではこの「見世物」自体に不備があるような印象を持ち、おそらく話者の意図するものとは異なるものとなる。では「いい見世物」とあればどうだろうか。これならば皮肉をこめた言い回しという印象が強くなる。この用例は、表面上はプラスの意味であるのだが、その内には皮肉のマイナスの意味が込められているのである。

1900年代初頭では「いいかげん」はマイナスイメージが現代ほど強く印象

づけられておらず、プラスの意味での用法もまだ生きていたと推察できる。現代ではたとえば「いい気味だ」「いい年をして」と言ったとき、それは皮肉であると誰もが感じるだろうが、「いいかげん」では、あざけりを含む意味はない。表向きはプラスの意味であるからこそ、その言葉の裏に他人をあざ笑う意味を持つ皮肉としての文が成立するのであり、「いいかげん」は表面上もマイナスの意味を表してしまい皮肉として用いることができないのだ。

第二節 程度の用法の一般性

程度をあらわす用法はどの年代においてもまんべんなく使用を認めることができる。以下のものは太陽コーパスで検出された程度の用法の例である。

(14)『馬鹿に仕て居やアがらア。好い加減に痴話を切上げて、喉でも聴かして呉れるが好いに……』
(江見水蔭『東京病』 1901年)

(15)あの態は實に醜だ！お美代さんも好い加減に別れて了へば可い
(柳川春葉『袴』 1909年)

(14)、(15)共に感情が高ぶり怒りを込めた乱暴な言葉づかいであり、筆者は近世の戯作文学と似た文体という印象を受けた。近世では話し言葉の中で発展した用法で命令形の文で多用されたことを述べたが、近代初頭でもその傾向があったようである。この程度をあらわす「いいかげん」は、江戸中期に話し言葉の中で注意や怒り、罵倒など、感情をあらわにして自分の意思を相手に伝える際の言葉として発展し、文学作品においてもそのような場面で頻出するのであろう。

新聞記事では1918年以降に徐々に程度をあらわす意味が増加しているようである。これは、それまでは新聞記事は感情を表に出すようなものではないためこの用法は使用されることは少ないのであるが、1918年頃からは言文一致が進み、この意味用法が書き言葉にもあらわれるようになり新聞でも確認できるようになったからではないだろうか。

第三節 マイナスの意味の用例の増加

マイナスの意味の用例は太陽コーパスでは1909年から登場し、その後は三つの用法の中でも多くの割合を占めている。また新聞記事においても、用例のほとんどがマイナスの意味での用法である。

(16)実に神田辺のいい加減な私立学校は、山村水廓の単級小学校よりも不潔にして
(東京時事新報 1912年)

(16)について神田は当時繁華街であり^(注2)山村の小学校よりも質が良いと考えられ、その山村水廓の小学校よりも不潔ならば、この場合の「いい加減」はマ

イナスの意味で使用されていると判断ができる。

第四節「すっかり、完全に」の「いいかげん」の出現

三つの用法について考察したが、それ以外に近代独特の用法が確認できた。かなりの程度という度合いの甚だしさを指すという意味ではあるが、これまでの「そろそろ」と言い換える事ができるものとは性質が異なる、「すっかり、完全に」という意味ととることができる用法である。

(17)民さんだつて暫らく浪人して好い加減苦勞をしたから最う大丈夫失敗る事は無からうよ、ねエ織江。(内田魯庵『投機』1910年)

(18)『見ると貴公は可い加減年も取つて居るやうぢやで、おれの娘とはチト不似合ぢやないか』(『政界の表裏 雑談』1917年12号)

(19)悪黨つて者には、誰れでも一度は其んな事が有るのだらうよ。つまり世間の奴等から善い加減捲き上げると、少々怖くなつて来て少し返してやらうと思ふんだネ。(オ・ヘンリー「滑稽小説 博愛数学講座」1925年7号)

(20)五十名近くの乗客を手荷物とを積み込んで、舢船が愈々岸をさして進み出したのは自分等が乗移ってから約半時間の後であった。その間に足も手もよい加減に冷え切つて仕舞つた(満州日日新聞 1919年2月25日)

(21)其の中には好い加減、年老つた婦人もあるが多くは妙齡の婦人で彼等は米軍の駐屯する仏国各地を見舞つては(神戸新聞 1919年5月1日)

(17)は苦勞をしたことに「いいかげん」でその程度をあらわしている。この場合は、これまでに味わつてきた苦勞の程度を説明しているのみである。この解釈では、現代のような「いいかげん疲れた(から休みたい)」のようなこれから先に起こる、もしくは起こつてほしい事象がうかがえないので「そろそろ」とは意味を同一にできないのである。よつてこの「いいかげん」は「すっかり」と解釈するのが適当だらう。

(18)では年齢が娘と不似合であることを論じているのであり、ちょうどよい程度では文脈にそぐわない。(19)「善い加減捲き上げる」を「ちょうどよい程度に巻き上げる」と解釈することもできるが、「怖くなつて来て少し返してやらうと思ふ」のであるならば、ちょうどよい程度とは考えにくい。こゝも「すっかり巻き上げてしまうと、怖くなってきて少し返してやらうと思う」とした方が自然であらう。(20)でも「待たされている間に完全に冷え切つてしまった」という意味と考えられる。(21)の例でも(18)のように年齢について用いられており、妙齡の婦人の対比として「好い加減、年老つた婦人」と表現されている。かなりの程度の意味用法に分類できるのであらうが、『日本国語大辞典』の記述に「(『いいかげんにする』の形で)かなりの程度までいっているので、もうほどほどに

したいさま」と示されているように、現代では、今現在継続している事柄が許容できる限界値に達してしまった、そのためにこれから先におこり得る事象を回避したいといった心情が含まれている場合、つまり「そろそろ」という意味に使用される。上記の例では今まさに進行している事態にかかるものではなく、すでに完了してしまった事柄にかかっているのである。現代「いいかげん」を語幹だけで副詞的に用いる用法があるが、この「すっかり、完全に」と解釈できる用法がその前身なのではないだろうか。

第五節 近代の「いいかげん」の特徴のまとめ

近代の用例を見てきたが、プラスの意味と分類したもののなかでも、「いい」の範囲の幅が広く「必要最低限に」といった意味が確認されたり、読み手の判断でプラスともマイナスとも、どちらの意味として考えても当てはまる用例が確認できた。また、近代独特の「すっかり、完全に」の意味用法が存在していたと判明した。近世において程度をあらわす意味の「いいかげん」が書記資料に頻出するようになり、プラスの意味用法、程度をあらわす用法、マイナスをあらわす用法の三つの分類がそろって観察できたのであるが、近代ではさらに皮肉として用いた用法や、「すっかり、完全に」といった新しい意味の用法に拡大されていったのだ。しかし、このさらなる意味の拡張によって、語の形式どおりのプラスの意味がしだいに影をひそめてゆくのである。

第四章 文法化

第一節 「いい」＋「かげん」の一語化と意味変化

この章では文法化に則り理論的考察を進めてゆく。文法化とは「(史的に)文法要素が発達して、機能的・語用論的・意味的・形態統語的・音韻的变化が生じること」^(注3)であり、歴史を経てゆく過程で、語の形式と、その語が内部に持つ意味や用法が発達し変化してゆくことを説明したものである。

大堀(2005)は例を挙げて文法化の一つ、語彙化について示している。

言語変化としての文法化の特色の一つは、語彙(自立語)から形態・統語(付属語)へというように、言語を構成する部門にまたがった変化だという点である。他にも、部門にまたがる変化としては、「打ち明けて言えば／打ち明けた話」>「ぶっちゃけ」のような例を挙げることができる。これは語彙化(lexicalization)の例で、統語論の産物としての内部構造をもった句が縮約されて、副詞的な語として使われるようになったケースである。

例を見たところ、室町時代にはすでにこの変化が起きていた可能性が高いと推測される。ちょうどよい程度というプラスの評価を表すために「いい」と「かげん」を接続し修飾・被修飾の関係であったものが、時代が下るにつれて二語が複合し「いいかげん」という一つの語に変化した。「いいかげん」は形こそ変化はしなかったものの、二語であったものが一語化し新たな単語として誕生したのである。その変化がいつ起こったのか、現段階で明らかにする手がかりがないが、『虚堂録臆断』での例を見たところ、室町時代にはすでにこの変化が起きていた可能性が高いと推測される。

第二節 「いいかげん」の意味の漂白化

そして意味的变化について Himmelmann (2004) の提唱した意味・語用論的拡張^(注4)で説明が可能である。再び大堀氏の例を引用する。

これに対し語彙部門の内部で起きる変化としては、例えば、「すごい」という語が「おぞましい」の意味から、肯定的な評価を含む程度表現になったり、同じく現代語で「やばい」の肯定的評価をもつようになったケースを挙げることができる。

文法化が起きた言葉は意味の拡張が起こり多義的になる場合が多いのである。「いいかげん」が形式そのままの「ちょうどよいさま」という意味で用いられていたのであるが、江戸時代に入り命令文を中心に程度をあらわす意味用法が目立つようになってくる。これは「いいかげん」がもつ「よい」の範囲が拡大され、「ちょうどよい」といった程度から「許容できる程度」も表すようになったためである。そしてさらに「まだ許容できる程度の限界」からわずかにでもはみ出した場合にマイナスの意味用法へと変化する。

また、言葉の意味の拡張に伴い、消えゆく意味もあることも文法化の特徴として説明できる。この現象は「意味の漂白化」という、文法化の特徴的な変化なのである。「意味の漂白化」とは「脱意味化」とも言われ、語の形式通りの意味が抽象化、希薄化、または消失することとされている。語の意味が多義的になった故にもととの「いいかげん」があらわしていた意味が希薄になり、次第に「いいかげん」という語が形式化して、内部に持つ意味は新たに派生したのものにとって変えられてしまうのだ。この「意味の漂白化」が生じた手がかりが1910年代から1920年にうかがうことができる。

おわりに

以上、「いいかげん」の意味変化を、時代を追って確認した。いつの時代か

ら存在していたかはまだ不明であるが、少なくとも室町時代には使用されており、意味もすでに起こっていた可能性もうかがえる。江戸前期に文語体で書かれた作品にマイナスの意味で使用されていることから、それ以前の時代からプラスの意味とマイナスの意味とを持ち合わせ得る言葉であったのであろう。室町時代の『仁和寺本無門関抄』のプラスの意味の用例も、結局は否定される文脈である。

江戸中期になり、話し言葉のなかでプラスの意味があらわす「ちょうどいい程度」の範囲が拡大し、「許容できる範囲」までをカバーするようになった。そして感情をあらわにする場面、特に命令の文で用いられることにより、評価を下す意味の語から単なる程度程度をあらわし「そろそろ」という意味で用いられるようになったと考えられる。プラス・マイナス・程度のみをあらわす意味を持つより多義的な語として変化を遂げたのである。

明治期に入ると、1910年前後からマイナスの意味での使用が目立つと同時にプラスの意味が衰退してくようになる。またその頃に皮肉のような用法と「すっかり、完全に」という意味に解釈できる新しい意味用法も登場し、この新しい用法がのちに「いいかげん」を語幹のみで使用する副詞的な用法として発展していくものと考えられる。

1700年代、1910年代という二つの時期が意味の転換期であり、時代の流れに伴い発展と衰退をくりかえし現在のマイナスイメージを持つ「いいかげん」が形成されてきたのである。

注記

- (注1) 総合雑誌『太陽』（博文館）の、1895（明治28）年、1901（明治34）年、1909（明治42）年、1917（大正6）年、1925（大正14）年の通常号の全文を対象とした。
- (注2) 『日本歴史地名大系』「関東大震災以前の神田は、中央線（中央本線）、市街電車（のちには地下鉄）が交差する交通の要衝であった万世橋を中心に繁華街が広がっていた。」
- (注3) 『歴史語用論入門—過去のコミュニケーションを復元する』より引用。
- (注4) 『歴史語用論入門—過去のコミュニケーションを復元する』参照。Himmelmann (2004) は文法化には語基拡張（もしくはコロケーション拡張）、形態統語的拡張、意味・語用論的拡張という3つのタイプのコンテキスト拡張があると考えている。

参考文献

- 堀井令以知『日常語の意味変化辞典』2003年6月 東京堂出版
- 高田博行ほか『歴史語用論入門—過去のコミュニケーションを復元する』2011年4月 大修館書店
- 小野正弘「中立的意味を持つ意味変化の方向について—「分限」を中心にして—」『国語学』141 1985年6月 国語学会

前田桂子 「『いいかげん』の意味・用法の変遷」『筑紫語学論叢Ⅱ—日本語史と方言—』2006年5月 風間書房
山口堯二 「副詞「よつぼど」の形成」『京都語文』第13号 2006年11月 佛敎大学国語国文学会
全賢善 「『適当』の運用上に現れる意味特徴」『名古屋大学人文科学研究』1998年3月
大堀壽夫 「日本の文文化研究にあたって—概観と理論的課題—」『日本語の研究』1(3)
2005年7月 日本語学会

用例

『新編 日本古典文学全集』小学館 より引用
『嘶本大系』全二十巻 東京堂出版 より引用
国立国語研究所（編）『太陽コーパス—雑誌『太陽』日本語データベース—』2005年 博文館新社 より検出
http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/woman-mag/
神戸大学付属図書館 新聞記事文庫より検出
<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/>

謝辞

『太陽コーパス』を用いた研究において、中尾比早子先生に多大なご協力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

(やまもとあやか)